

# 物質的宗教論からみる仏壇

Understanding *Butsudan* through Material Religion Perspectives

村上 晶

MURAKAMI Aki

はじめに

① 物質的宗教論誕生の背景

② 従来の仏壇研究の論点

③ 津軽地方の3家庭の仏壇の事例から

小括

結論

## 【論文要旨】

本稿は、物質的宗教論 (material religion) の視点から仏壇と人との関係性を問い直すものである。まず、物質的宗教論の誕生の背景とその議論について概観し、次に、具体例として津軽地方の3例の家庭の仏壇について論じていく。近年の宗教研究の一つのトレンドといえる物質的宗教論の背景には、宗教学において物質性の問題が軽視されてきたという反省がある。宗教とは信仰の問題であるという前提が強力であったためである。哲学や人類学という近接領域におけるモノをめぐる議論の影響も受けた物質的宗教論は、モノを人間の信仰の表出としてみるのではなく、宗教的な感覚がモノや実践との関係のなかでどのように生じるのか、その生成的な側面を明らかにすることに強調点をおく。この視点は仏壇研究にも有効である。従来の研究では仏壇が日本人の霊魂観や家観の表出として捉えられ、仏壇と位牌を通して、背後にある「〇〇観」を明らかにすることが目標とされてきた。しかし、物質的宗教論の視点は、背後に固定的な思想があることを想定することなしに、仏壇と人との関係性から改めて仏壇というモノ・空間について考える必要性を教える。そうした視点から具体的な事例を見ていくと、仏壇の構成要素として重要なのは本尊や位牌のみならず、仏壇内やその周囲に置かれた雑多なモノの数々であり、そうしたモノの蓄積が死者を感じさせるものとなっていることがわかる。個人の意思には還元できないモノとの不本意な関係性が仏壇を成り立たせているともいえるのである。また、同時代においても、家系志向・家族志向・個人志向という異なる仏壇と人との関係性があることも指摘できる。それにより、メモリアリズム論や位牌中心の仏壇観という既存の仏壇研究の視点に対して再考を促し、仏壇という場を継続させているのは、画一的な「日本人の祖先観」などではなく、生者と家族と故人とモノとの、それぞれに固有の関係性であることを指摘する。

【キーワード】 仏壇, 物質的宗教論, 信仰